

明代の政治制度

張 德 信
陳 建 平 訳

一、序言

明王朝の成立は、その歴史的発展段階から言えば、すでに封建社会の末期であり、いたる所に衰退の形痕が現れている。同時に、明の成立は元の廃虚の上に建てられたもので、元の立ち遅れた性質はある程度明に持ち越されることになった。この時代的特徴は、明の政治制度の設立と改革及び発展過程の中にも、明らかに具体的に反映されている。

朱元璋が建国前後に設置し、当時の実際の状況によって改革された政治制度は、従来の歴代王朝と異なり、大きな変化が見られる。朱元璋の目的は政令の実施と政権の安定にあった。朱元璋が建国した明は、しばしば封建中央集権が更に集中強化された王朝であると言われるが、その多くは政治制度に着目した結論である。要するに、明の中央集権の集中と強化とは政治制度の改革を通して体现されたものである。

二、概況

明の政治制度は、中央政務系統・地方三司のような重要衙門の設置において、おおよそ草創・建立・改制・確立の四つの段階を経ている。

(一) 草創段階 (一三五五—一三六一)

朱元璋は果敢勇敢な精神と知恵に頼り、一介の親兵からまたたくまに起義軍の首領となった。元の至正十五年(龍鳳元年・一三五五)六月、太平を攻め取るところを太平府と改称し、太平興国翼元帥府を設置して、自ら元帥に就任した。その後、城を攻め落とすたびに、直ちに元帥府を設置し軍隊を指揮させた。また幾つかの戦略的要地に千戸・副千戸・万戸・副万戸などを置き、移動配置に従わせている。

元の至正十六年(龍鳳二年・一三五六)朱元璋は江南行中書省を置き、自ら省の事務を執っている。同年六月、太平行枢密院を設置し、これも自ら管理し、その下には同知・僉院・門僉・判官などが置かれた。

元の至正十八年（龍鳳四年・一三五八）婺州を攻め取ると中書分省を設置し、それ以降、省・府を占領するたびに直ちに行中書省を設置して、行省平章政事・左右丞・參知政事及び屬官を置いた。

元の至正二十一年（龍鳳七年・一三六二）三月、朱元璋は行樞密院を大都督府に改め、朱文正を大都督とし中外の軍事を指揮管轄させて、その下に、司馬・參軍などを置いた。同年十月、さらに大都督府左右都督・同知都督・副使・僉事・都事などを増置した。同時期に、各行省に行都督府を設置している。

戦時のため、職官の設置は完全に元の旧制を踏襲しており、官吏の職掌も明確でないのは、戦争の必要とするものに適応することが原則だったためである。

（二）建立・完備段階（一三六四—一三七九）

元の至正二十四年（龍鳳十年・一三六四）正月、朱元璋は群臣に推戴され吳王に即位すると、ただちに各衙門・官職の設立に着手した。まず中書省を設け、左右相国・平章政事・左右丞・參知政事・左右司郎中などを設置し、李善長を右相国に、徐達を左相国に、常遇春・俞通海を平章政事に、汪広洋を右司郎中に、張昶を左司郎中に任命した。その後、胡惟庸・汪広洋が丞相職を引き継いだ。この時期には中書省は政務の中樞になっており、全国の政務を統轄し、官吏の任命・

政教の命令・法規の制定及びもとと門下省・尚書省の管轄であった封駁や施行の権限を全て掌握した。このため、丞相はさながら百官の上に君臨する絶対的な権力者であった。

中書省の下に四部を設置し、それぞれ錢糧・礼儀・刑名・營造の諸務を掌った。

元の至正二十五年（龍鳳十一年・一三六五）正月、朱元璋は朱元璋に罪ありとして、免職させ桐城に左遷した。その後大都督職を廃止し、左右都督を長官とした。

吳の元年（元の至正二十七年・一三六七）朱元璋は百官に「尚左」即ち、左を尊ぶことを命じた。このため、右相国を左相国に、左相国を右相国に改めた。さらに元をまねて、御史台及び各按察司を設置することとした。御史台の下には殿中司と察院を設置した。その官職には左右御史台大夫・御史中丞・侍御史・治書侍御史・殿中侍御史・察院監察史がある。また大理寺・太常寺・宣徽院・侍儀司及び翰林国史院などの衙門を設置し、それぞれ裁判の再審理・祭祀礼楽・外交儀礼及び制誥と史冊文翰の諸務を取り扱った。

洪武元年（一三六八）相国を丞相と改称した。同年八月に中書省に属していた四部を吏・戸・礼・兵・刑・工の六部に増やし、部ごとに尚書・侍郎・郎中・員外郎・主事などの官を置いた。それぞれ全国の官吏の選抜と任命・戸籍と田租・儀礼・貢奉・武衛軍官の任命・簡練・刑名・山沢など諸方面

の政令実施の実施を分掌した。

この段階で、中書省・大都督府・御史台及び京城の官吏の設置といった中央官制の仕組みはほぼ完成された。朱元璋は、かつて「国家に三大府を立てて天下の政を総べる。中書は政の本であり、都督は軍隊を掌り、御史台は百司の秩序を維持する。朝廷の紀綱は、すべてここにある」と述べている^⑤。地方においては、行中書省・行都督府・各道按察司及び府州県の設置も、ほぼ揃い、封建国家機関の正常な運営が保証されるようになった。

しかし朱元璋はこれに満足せず、関連機関に対して更に明の社会へ適応できるような改善策をとった。それは中書省の平章政事・参知政事・一部の属官及び六部の属司を淘汰するほかに、主に地方官制の完備に現れている。

一、都衛を都指揮使司に改組

洪武三年（一三七〇）杭州などの衛を八つの都衛指揮使司（都衛と簡稱）に昇格させ、洪武七年（一三七四）河州に西安行都衛を設置した。八年（一三七五）十月、朱元璋の詔令により都衛は都指揮使司（都司と簡稱）に改称され、行省の最高軍事機構となった。そして改めて都司を十三、行都司を三つ設置した。宣徳年間には全国で十六の都司、五つの行都司があった^⑥。

都司は一地方の軍政事務を掌り、それぞれの衛所を率い、

五軍都督府に属すると同時に兵部の命令に従い、地方の安定を保障した。もし重大な軍事行動があれば、移転・配置の命令に従った。移転・配置の最終決定権は皇帝にあった。

二、行中書省を承宣布政使司に改組

洪武九年（一三七六）六月、朱元璋は浙江などの十二の行中書省を承宣布政司に改め、行省平章政事・左右丞を廃止し、参知政事を布政使に改称し、左右参政を置いた。十四年（一三八一）に左右参議を増設し、まもなく左右布政使を一人ずつ増やした。宣徳三年（一四二八）には全国で十三の布政司があった^⑥。

布政使は地方の行政長官であり、凡そ朝廷からの徳沢・禁令があれば、それを受け管轄する府州県に伝達した。また官吏の審査・田賦の徴収・徭役の割り当てなども、すべて長官と属官の職分の範囲であった。朱元璋は「古代の帝王は天下を治めるにあたり、上下の意志疎通が滞ることを防ぐため、必ず広く意見を聞き入れていた。今日の布政使司は即ち古代の方伯の職にあたり、各府の知府は即ち左刺史の職に相当し、以てわが国民を承流・宣化・安撫する。」と述べている^⑦。

三、通政使司の創設

洪武三年（一三七〇）三月、察言司を設け、各地からの章奏を受け取り、管理するようにさせた。洪武十年（一三七七）七月に、通政使司を創設し、通政使・左右通政・左右参議な

どの官職を置いた。なぜこの衙門を創設し、しかも「通政」と命名したかについて、朱元璋は通政使曾秉正への告諭の中で、次のように具体的に述べている。「壅蔽於言者禍乱之萌、專恣於事者權奸之漸。故必有喉舌之司、以通上下之情、以達天下之政。昔者虞之納言・唐之門下省、皆其職也。今以是職命卿等、官以『通政』為名。政猶水也、欲其常通、無壅蔽之禍患。卿其審命令以百司、達幽隱以通庶務。當執奏者勿忘避、當駁正者勿阿隨、當敷陳者勿隱蔽、當引見者無留難。毋巧言以取寵、毋苛察以邀功、毋譏問以欺罔、公清直亮以処厥心、庶不負委任之意」。

通政司の職掌は主に、皇帝の命令の伝達・民衆からの意見の報告・実封の検査・関所における公文書の検証などであった。

(三) 改制段階（一三八〇—一三八二）

洪武十三年（一三八〇）の正月に、朱元璋は中書省左丞相であつた胡惟庸を反逆罪で死刑に処した。これが史上いわれる「胡惟庸党案」という事件である。この時、連座して処刑された人数は一万五千人にも達した。その後、中書省と丞相は廃止され、六部の地位は格上げされて皇帝に直屬した。また、大都督府を五軍都督府（左・右・中・前・後の五つ）に分け、別々に軍隊を指揮させた。その目的は行政の流れをよくすることに留まらず、権力の分散にあつたと考えられる。二千年

踏襲されてきた丞相制はここに終止符を打った。

同年五月には、御史台を廃止し、十五年（一三八二）に都察院を設置し、左右都御史・左右副都御史・左右僉都御史などを置いた。また、各地域に十三道の監察御史を設けた。都御史の職権は、百司の弾劾・冤罪を正すこと及び各機関の監察であつた。一方、監察御史の職権は内外百司官吏の過ちと弊害をただすことであつた。

朱元璋は、中書省を廃止した後、洪武十三年（一三八〇）九月に四補官を設けた。その職能は治国の道を講じ、裁判と審判及び封駁に参与し、有能な人材を選抜することであつたが、十五年（一三八二）七月に廃止された。十一月に、また宋朝の制度をまねて殿閣學士を設けた。その職能は皇帝の左右に奉持し、諮問に備えることである。

(四) 確立段階（一三九五—一四四一）

大胆な改革、とりわけ二千年間踏襲されてきた丞相制を廃止した後、朱元璋は洪武二十八年（一三九五）群臣に対し「國家は丞相を廃止して置かないこととする。その代わりに五府・六部・都察院・通政司・大理寺などの衙門を設け、それぞれ天下の政務を取り扱う。これがもっとも完璧なものである。子孫及び群臣は再び丞相設置の話をしてはならない。さもなければ極刑にあてる」と告諭した。同時にそれを永遠に守るため、『皇明祖訓』にも載せた。

総じて言えば、明の政治制度の枠組みは洪武末年にほぼ確立されていた。内には部・府・院及び通政司・大理寺などが設けられ、政務・軍事・糾察及び章奏・刑獄などの諸務を分担処理する。外には都・布・按の三司を設け、兵刑錢穀及び百官の監察を分掌する。これはみな漢・唐の制度を踏襲しながら、明代の社会と政治の実情に照らし合わせて改正を加えた結果である。

建文朝では、朱允炆が儒臣の提案によって一部の官職を改称し、一部の職官の官階を引き上げた。しかし燕王朱棣は、武力で皇帝の座を獲得したのち全てを原状に復した。また建文四年（一四〇二）から、内閣・巡撫・總督などの制度が設けられており、これらにより、明の政治制度は確立段階に入った。

一、内閣

建文四年（一四〇二）七月、朱棣は甥に取って代わって皇帝の座についた。その後の八・九月の二ヶ月間に、解縉・黃淮・胡広・楊榮・楊士奇・金幼孜・胡儼の七人を相次いで文淵閣に入閣させ、顧問として重要な事務に参与するよう命じた。内閣はこれによって成立した。

はじめ内閣の閣臣は、ただ翰林院の編修・檢討・侍読・侍講のような肩書きに過ぎなかったが、次第に大学士の地位にまで昇った。だが、その下には官属を置かず、諸司も管理さ

せなかった。仁宗朱高熾（一四二五）の時、閣臣はみな尚書・太保・太傅のような重要な地位についており、発布される政令は、殆ど閣臣により起草され、皇帝の旨を伝達することになった。それ以降、六部の尚書でさえも内閣の鼻息をうかがわざるを得ない状況になった。この時期の内閣はすべての政務を統轄しており、丞相の名を持たずに丞相の権限を具えていた。嘉靖朝になると、朝班する順位すら六部の上になった。

内閣の職権は、概括して言えば、批答の起草・誥勅と封駁の起草・企画と審議・経筵進講などであった。職権の実施については皇帝と閣臣の素質と大いに関わっており、生み出された結果も異なる。皇帝に比較的高い素質と相当な決断力があれば、閣臣はみな命を奉じて事を行い、敢えて軽率に事にあたるようなことはしなかった。また閣臣の素質が高ければ、彼らは国家の利益を考え力を尽くし、皇帝の政務処理を補佐した。皇帝・閣臣ともに素質が低く、とりわけ奸邪を懐く閣臣がいれば、閣臣は皇帝の無能さにつけ込んで、賄賂で官職・爵位をあたえ、派閥を作り国家国民に禍を及ぼすことになった。

二、兩京制

永樂元年（一四〇三）朱棣は北平を北京と改名し、北京行部尚書を一人、侍郎を四人設置し、下に六曹清吏司を設けた。後に六部を分置し、部ごとの名称に「行在」を加えた。十八

年（一四二〇）首都が北京に定められると、行部及び六曹を廃止し、六部を北京に遷し、「行在」を称することはなくなり、南京に残された衙門には「南京」という二字を加えた。

洪元年（一四二五）に再び南京に各官庁を設け、呼称から「南京」の二字を外した。その代わりに、北京にある衙門の呼称に「行在」の二字を加え、依然として行部を置くこととした。宣徳三年（一四二八）行部を廃止した。正統六年（一四四一）北京の衙門の呼称にある「行在」という二字を取り、その代わりに、南京に設けられている衙門の呼称に「南京」の二字を加えた。ここに北京の両京制が正式に確立されたのである。¹³⁾

三、巡撫

史籍の記載に「巡撫」の呼称が明において最も早く見られるのは、洪武二十四年（一三九一）朱元璋が太子朱標に陝西を巡撫させた時である。建文・永樂朝においても大臣を派遣し全国の州・県を巡視させ軍民を慰撫することもあったが、みなある具体的な事件を処理するため、臨時に皇帝の命令を受けて赴き、事が終わって復命すれば、派遣は解除された。宣徳の初めは、地方に派遣される大臣は相対的に安定しており職掌も明確であった。そこで宣徳五年（一四三〇）独立して巡撫を設置した。その後、各布政司或いは要地に幅広く設置されることになった。天順の初め、暫く廃止されたが、ま

もなく再び設置された。関連事務処理の便利を図るため、巡撫は一般に都御史、副都御史或いは僉都御史の肩書きを兼ねていた。¹⁴⁾

巡撫の職権は地方三司の権限を兼ねた。その内容は、官吏の管理・官吏の弾劾・治安維持・流民の慰撫・辺関の鎮守・辺政の管理・被災者の救済・徳意の宣伝・人材の推薦・利病の報告・地方の安定などであり、あたかも三司を凌駕するような行政衙門になった。

四、総督

総督は戦時の必要によって設けられたもので、英宗の正統年間に始まる。正統六年（一四四一）七月に麓川を征服した時、兵部尚書王驥が総督に任命された。景泰三年（一四五二）には苗族の反乱を鎮圧するため、両広総督が設けられた。薊遼有事の際には提督が設けられ、後に総督に改められた。こうして次第に地方における正式な官職となった。

総督は、朝廷が重臣の中から派遣し担当させるもので、一省或いは数省の軍政事務を管理し、巡撫・総兵に対し指揮・管轄することができ、権力の上で巡撫を凌駕していた。

三、明代政治制度の特徴と弊害

（一）権力の相対的分散から集中と強化へ、すべて皇帝に帰

するのは明代政治制度の一つの特徴

朱元璋は軍隊を率い始めた当初より人材集めに十分な注意を払い、発展に役立つような積極的要素を吸収して、自身の不足を補っている。のちに朱元璋の勢力は次第に大きくなり、江南の陳友諒・張士誠などの群雄に対抗するほどになると、勢力範囲内に官職を設け、占領地域に適切な管理を行った。この時期における官職の設置の第一は経済関係の衙門で、目的は軍隊の給養及び官員の費用の充実にあった。第二は軍事関係の衙門で、目的は城を攻め取るにあたり江南群雄との戦争を有利に進めることにあった。行政衙門についても概ね戦争遂行の必要に応じるという主旨に従っている。

朱元璋は陳友諒に対して決定的な勝利を収めると、正式に中書省・行中書省などの中央と地方の政務衙門及び関連機関を設置し、明朝の成立後、政治制度は次第に完備されていった。しかし、この時期から朝廷内部の対立が表面化し、日増しに激しくなった。それは、主に二つの面に現れた。

第一 文臣と武將との対立と地方勢力集団間における対立
朱元璋は「世が乱れば武將を用い、世を治めようとするれば文人を用いる」という信条を固守した。それゆえ明の建国後、戦功への報償として直ちに武將に公・侯・伯などの爵位を与え、厚禄を賜った。また国家を管理するため、才能と見識のある人物を取りたて要職につかせた。しかし、戦功をた

てた武人たちは功勞を持んでほしいままにふるまい、君臣の別もわきまえず、大臣としての振る舞い方さえも守れなかった。彼らは勢力・権力をかさに着て罪を犯し、郷里を凌辱した。そのみならず、文臣・儒士を重視することに対して大いに不満を抱き、機会に乘じ陰口して、朱元璋と文臣との関係を裂こうとした。ある時、武將たちは朱元璋に次のようなことを言っている。「文臣儒士らはみな風刺と嘲笑になれた

やつにすぎない。例えば張士誠は文士を極めて優遇しているが、しかし彼が文士に願って命名してもらったとき、文士がなんと彼に『士誠』という名前を付けたのです。」朱元璋はそれを聞いて、この名前がいいではないかと言った。武將たちは次のように言った。『孟子』には「士誠、小人なり」という文があり、実際、文士たちは彼を侮辱している。それなのに、彼は気がつかなかったのだ。」⁵⁵朱元璋はそれを聞いたが反論はしなかったという。ここからは武將の間、武將と文人との間の緊張関係や激しい闘争の一端が窺える。

地方派閥間における対立の激しさも前者に劣らないほどであった。その対立は政治権力の配分と既得権益の確保のため、ますます深刻であった。それは主に淮西集団と非淮西集団との関係に表れている。

淮西集団とは朱元璋が蜂起した時についてきた郷里の旧友を指し、文臣の李善長・胡惟庸、武將の徐達・湯和などのよ

うに、明王朝の成立に大きな戦功を立てた。非淮西集団とは、浙江の劉基・宋濂及び山西の楊憲などを指している。そのうち、李善長と劉基は一部の事務処理について意見が合わず、劉基としては李善長が皇帝への汗馬の労があることを知っているの大半は我慢していたが、時に争うこともあった。また楊憲は大変な才能を持ち、度々皇帝の前で李善長の無能と横暴を訴えていた。言動や顔色から人の心を察することが巧みであった胡惟庸は、朱元璋に楊憲を重用する意志があることを察し、すぐに淮西集団内部に、「もし楊憲が重用され高官になったらわれわれ淮西の人間にはもう見込みは無くなるだろう」という噂を流し、また口実をもうけて楊憲を非難し、陥れようとしている。朱元璋は内部対立をおさえるため、一方では理由をもうけて楊憲を殺し、一方では李善長に退官と帰郷を命じた。その後、朱元璋は暫く躊躇してから汪広洋・胡惟庸を相次いで後任の丞相とした。

第二 君権と相権との衝突

李善長の丞相在任期間中については、彼に帷幄の功績があり、また慎重に事を処理していたのに加えて、朱元璋は勝利の喜びに浸っており、君王と丞相との関係は良好であった。李善長の後、汪広洋が中書省の事務を切り盛りしたが、朱元璋は十分に満足しなかった。また胡惟庸が右丞相・左丞相に就任した後の様子も冷静に観察していた。勝利のもたらした

喜びが薄らぐと、潜在していた権力への欲望は彼に別の角度から君王と丞相との関係を考えさせた。彼は丞相の権力が大きくなりすぎると、必ずや自分への脅威となり、更に事の真相を隠し自分の目をごまかし権力を一手に握る危険すらも招きかねないと考えたのである。このような事態になると朱氏の天下の万世世襲はもはや水泡に帰すに違いない。そこで彼は中書省即ち丞相の権力の弱体化に着手し、以下の措置を取った。

第一に、行中書省を承宣布政使司に改称した。朱元璋により設置された時の行中書省は、一省の民政・財政・軍政と司法・監察などの最高衙門として管轄区域内の全てを管理していた。しかし改制の後、それまで一つの衙門の職掌であったのが、都司・布政司・按察司の三つの衙門によって管理されるようになった。しかも三司は並列であり、互いに統括したり隷属したりせず、また同時に地方三司は中央の命令に従わなければならないと規定され、中央政令の執行者と実施者にすぎなくなった。その結果、布政司は多く六部、主に吏部・戸部と連絡をとり、按察司は都察院・刑部と連絡をとり、都司は多く兵部・五軍都督府の命令に従った。こうして地方の権力は直接朝廷の手に握られるようになった。

第二に、行中書省の改制の結果、地方権力は中央政府に牛耳られたが、かえって中書省の権力はますます膨らんだ。そ

ここで朱元璋は機に乗じて中書省の平章・參知政事などの職官を淘汰し、中書省を丞相のほか、下に官吏のいない状態にした。

第三に、朱元璋は民情をよく知らなかったため滅びた元の教訓を汲んで、洪武十一年（一三七八）に六部及び六部の各司に、奏章があっても中書省に報告してはならないという詔令を下した。これにより、六部の諸司と中書省との連絡は切断され、皇帝本人が直接に各政務衙門からの奏章・表文を処理することとなり、中書省及び丞相には実質的に政務を処理する必要がさほどなくなった。

しかし朱元璋はこれに止まらず、洪武十三年（一三八〇）正月に胡惟庸に国家反逆罪を押し付けて殺した。これを契機として中書省と丞相を廃止して六部を格上げし、五府を分けて皇帝直属体制を法律によって定着させた。そして中央から地方までのすべての行政・軍事・司法・監察の権限は全面的に皇帝の手中に入り、封建中央集権は史上空前の集中と強化を見た。その後、内閣が成立しても、この構造にはさほどの実質的变化が見られなかった。

(二) 各衙門が相対的に独立し、皇帝に直属すると同時に、また相互制埃の体制を導入し、相互牽制と専権防止のため、一つのことを処理する権力を幾つかの衙門に分担させ、総裁権が皇帝に帰するのは、明代政治制度のもうひと

とつの特徴

一 行政権

朱元璋は改制後、政務を六部に帰し、それぞれ人事・財政・礼儀・軍事・司法・百工・山澤などを掌らせた。六部の各部は相対的な独立性を持っており、皇帝に直属することになっているが、その権限を実行する過程で関連衙門からの牽制と制約を受けた。六部の中でもっとも尊ばれる吏部を例とすると、吏部の職掌は、天下百官の選抜・考課・昇進降格及び封授と規定されるが、官吏選抜については、内閣の閣臣が次第に干渉していき、ついにはその権限を奪い取るまでになった。

吏部に対する内閣の干渉の度合いは、皇帝に寵愛し信用される程度と正比例する。天順年間、吏部尚書として入閣した李賢は並挙法を提案した。即ち官に欠員がある場合、吏部が二名の候補者を指名し皇帝が決定するという法であるが、英宗皇帝の時代になると、内閣の干渉はいっそう進み、四品以上の官に空席があれば、その後任は吏部が指名し内閣を経て最後に皇帝が決定することとなった。さらに嘉靖・万暦年間に至ると、内閣が全面的に関与し、その上にさらに吏部の権力を奪い取るようになった。その例として嚴嵩が併せて吏部を掌ったことと張居正による官吏考察法を挙げることができる。史籍の記載では、制度的には、六部は分別して天下の政務を管理し内閣が干渉できないことになっていた。だが嚴嵩

の時代になると、次第に六部の権力の実施に干渉し妨害するようになった。張居正の時には、六部の権力は内閣に奪い取り尽くされたため、六部の長官がまるで属吏のようになった。祖宗の制度はこれによって大きな変化が起きた。^⑨吏部の長官は自身の職権を守るために闘ったが、何も改変できずかえって状況は悪化した。崇禎年間には、内閣次輔温体仁と吏部尚書閔洪学とが結託して悪事を働き、異分子を排斥したため吏部はひたすら温体仁の言いなりになり、唯々諾々と彼の意志に従うようになったため、結局、吏部の職権が奪い尽くされることになった。

二 軍事権

軍事権力は、兵部と五軍都督府に属するが、そこには職掌の分担があった。兵部は全国の武官の選授と簡練を掌り、五軍都督府は各々若干の都司・衛所を率い兵部に達し、五府の間には統轄と隸属の關係がなく直接に皇帝の命令に従うことになっていた。実際に事が動く場合、兵部は軍令の頒布権と士官の銓選権を持っているが、軍隊を指揮・移動させる権力は持っていない。一方、五軍都督府は軍隊を統率する権限を持っているが、出兵する権限は持っていない。有事の時、兵部は戦争の規模によって軍隊出動の意見を提出し皇帝に報告する。皇帝の許可を得てから兵部は軍令を頒布し、都督府長官が命令を奉じ、將軍或いは總兵官に就任し、移動配置され

た都司・衛所を率いて出征する。戦争後に都督は府に戻り、將軍印或いは總兵官印を返し、兵士たちはもとの都司・衛所に戻る。王世貞はこれをみて次のような結論を出した。五軍都督府の権力は兵部にひそかに奪い取られ、軍権も次第に分割された、と。^⑩朱元璋がこのように処置したのは軍権が集中し過ぎて明の政権に脅威になるのではないかと恐れたためである。その後、巡撫兼提督及び総督が設置され、軍権はさらに分散された。

三 司法権

明の司法権はそれぞれ刑部・都察院・大理寺によって掌られる。刑部は全国からの刑事訴訟事件を受理し、都察院は取り締まりの役を果たし、大理寺は駁正を掌る。その職権における具体的な実施順序は次のようになっている。

刑部は受理された事件を『大明律』の量刑標準によって審判する。それから犯人と關係文書、審判意見を大理寺に提出して再審させる。もし間違いがあれば刑部に渡して執行する。もし刑部に異議があれば却下して再審させる。都察院の職権は案件の全過程を通して刑部の審理を監督すると同時に大理寺の再審と駁正をも監督しなければならない。重大な事件にあたって三法寺による共同審理を行い、判決意見を提出し、最後に皇帝が決める。これからも明らかなように、皇帝はまた最高の司法権も持っている。ここで大理寺における職

権の歴史的变化を説明する必要がある。宋代以前にあつては、大理寺は訴訟事件の審理と判決を掌り、刑部が再審と却下を行った。元代には大理寺は廃止され、その職掌は刑部に帰した。そして刑部は審理・判決を行う衙門になり、さらに監獄も設けられた。明代には、再び大理寺を設置したが、しかし宋代以前のように、犯人の審理と判決を取り扱わず、元の制度を継続し、依然として刑部は犯人の審理と判決を行い、大理寺の職掌は事件の再審と駁正に変わった。これが一つの変化である。もう一つの変化は、宋代以前には刑部による再審と却下は書面の形式で行われたが、明代では、刑部のが判決を下した事件に、大理寺が再審・駁正する際には、自ら公文書を閲覽し、また自ら犯人を訊問したという点である。永樂以降の大理寺には尋問用の刑具も設けられている。

四 監察糾劾権

百官に対する監察・糾劾権は都察院の主要な職掌である。監察とは職官監察と行政監察に分けている。職官監察の中にはまた考察・考滿などの名目がある。百官を考察する場合では都察院が中央官員に監督・考察を行う。一方、吏部のほうには考功司があり、同様に官吏への考察と黜陟を掌る。十三道監察御史は地方の官吏への監察を掌り、同時に按察司官と布政司参政が参与する。行政監察の面においてもまた六科給事中の参与がある。

都察院は監察御史による官員糾劾の妥当性を監督し、觀察の職に相応しいか否かを審査する権限を持っている。ただ監察糾劾を行う過程で監察御史は極めて大きな独立性を持っている。だから、明の監察御史は職掌において都察院と関連しているが、都察院の属官ではないため、監察糾劾事件があれば皇帝に直接奏請することができ、都御史に報告せずに済む。更に大事件については報告するが、小事件は独立で決める権力を持っている。これは唐の時、御史は弾劾を行うならば必ず事前に大夫に報告するという規定とは大きく異なっている。

監察と糾劾とはある意味で言えば君主も含めての監察と糾劾である。唐宋の時期には組織上に三つの系統、即ち御史台・諫官と給事中があった。監察官としての御史台の御史は主に官吏の過ちを監察・糾劾する。言事官としての諫官は主に規諫諷諭し君主の過ちを諫正する。封駁官としての給事中は皇帝の不適切な詔令を封還したり百司の間違つた章奏を駁正したりする。三者の分担は非常に明確であつた。しかし明に至ると、諫官は廃止され、二つの監察系統に変わった。一つは都察院系統であり、十三道監察御史が含まれる。もう一つは六科給事中系統である。ただし監察・糾劾の対象は諸司と百官に限り、君主への監督機能は弱まった。

明の二つの系統に分かれた監察・糾劾権は、それぞれ重きを置くとところが異なつていた。都察院系統は各級官吏の法紀

への監察に偏重するが、給事中系統は諸司・百官の行政監察に偏重する。その重点は第一に、紀綱紀律の肅正であり、第二に、地方官の治績・作風の整理整頓である。二者の目的は封建中央集権の統治を維持することにある。その後、また巡撫もそれに参与し、更にもう一つの手順が増えることとなった。

明の政治制度の特徴をまとめるとすれば、朱元璋の言葉が最も適当かもしれない。彼は次のように述べている。「丞相を廃止し五府・六部・都察院・通政司・大理寺などの衙門を設置し、天下の庶務を分担させ、互いに牽制し合い、互いに抑圧できないようにさせる。事は全て朝廷により決めるので穩当だ」と。彼の言葉の要点は、互いに牽制し合い、互いに抑圧せず、最後は朝廷が統べることになる、ということであり、つまり権力を皇帝に集中させることが目的なのである。

(三) 明代政治制度は中国封建歴史の発展過程において積極的な一面もあれば弊害の一面も極めて顕著

一、中書省と丞相を廃止するのは朱元璋の断固たる処置とは言え、実際にもたらしたマイナスの要素もかなり多い。本来、丞相は百官の第一人者で、しかも皇帝の過ちを矯正する権力を持っていた。しかし丞相が廃止された後、名目上、政務は六部により分担して処理され、ほかに五府・都察院・通政司・大理寺なども加えられているが、実際には各自が皇

帝に責任を負いつつ総裁する権力を有したため、皇帝は百官の首領になった。その後創設された内閣の権力は低下し皇帝の顧問・助手になりはてるので、その職権について言えば丞相とは比較にならないものである。とりわけ皇帝が猜疑心にとらわれて、百官・大臣を信用せず宦官を自分の腹心と見なしたため、結局、明の宦官の禍はますますひどいものとなった。黄宗羲は『明夷待訪録』の「置相」の中で「明の悪政は明高皇帝の丞相廃止から始まったのである。また宮奴(宦官をさす)に宰相の実力を持たせたのは丞相廃止の過ちだ」と指摘している。

二、諸司衙門の相互牽制と相互監督は専権を防止できるが、政令の実施において互いに責任のなすりあい免れ難いため、効率向上に悪影響を与える。ここで例を挙げてみよう。軍事権は兵部と五府とに分属し、兵士の訓練・統帥と軍令の調配が別々にされているため、その結果、兵は將を識らず、將は兵を識らないことになる。戦闘力の弱化いうまでもないだろう。また、地方三司の分立の場合、相互の統属関係がないため、一部の政令はなかなか実行できないし問題の解決もできない状態になっている。このために巡撫が設けられたのだが、しかし二つ以上の省と関わる事件にあたると、省と省の間でしばしば責任をなすりあうことになる。特に戦争が起こった場合は急を要するため、紛糾の禍は更にひどくなる。

このため、その上にまた総督が設けられる。このように幾層も官が設置され、しかもそれがみな職権範囲をもっている。一つの事件に対する具体的な処理にあたって、公文書の行き来には時間もかかり、やりにくくなる。よって、事件解決の重要な時機を逃すことになりかねない。これは朱元璋の所謂「互いに牽制し合い、互いに抑圧できない」のもう一つの直接的な結果である。

注

- (1) 『明太祖実録』卷一四、(至元二十四年・一三六四年) 甲辰春正月丙寅の条(一日)によると「李善長、徐達等奉上為吳王。時群臣以上功德日隆、屢表勸進。上曰、戎馬未息、瘡痍未蘇、天命難必、人心未定。若遽称尊号、誠所未遑、昔武王克商、戡干戈、櫜弓矢、歸馬於華山之陽、放牛於桃林之野、大告武成、然後与民更始、曷嘗遽自称尊、今日之議且止、俟天下大定、行之未晚。群臣固請不已、乃即吳王位。建百司官属、置中書省左右相國為一品。」

- (2) 『明史』卷一〇九「宰輔年表」によると、以下のようになっている。洪武三年正月に李善長が左丞相に就任し、右丞相徐達は命を奉じ北征を行った(十一月に都に帰還、その後また命を奉じ軍隊を率いて遠征を行っており、中書省の政務を管理していない。洪武十八年二月に死去)。時に左丞相だった

汪広洋は右丞相に昇進した。六年正月、汪広洋が広東右参政に左遷され、右丞であった胡惟庸は同年七月右丞相に、十年九月に左丞相に昇進した。同時に汪広洋も右丞相に復職した。十二年十二月に汪広洋は海南に左遷され、死を賜った。十三年正月、左丞相胡惟庸に死を賜った。

- (3) 『明太祖実録』卷一五、甲辰十一月辛酉(二日)の条に「上謂中書曰臣、立国之初、致賢為急、中書・百司綱領、総率群属、須采拔賢者与之共理、但任人之道、大小轻重各適其宜。」とある。

『明太祖実録』卷三四、洪武元年八月丁丑(九日)の条で朱元璋は中書省の閣臣に「国家之事、総之者中書、分理者六部、至為要職。凡諸政務、須竭心為朕經理、或有乖謬誤、則貽患天下、不可不慎。」と諭を下している。

『明太祖実録』卷三九、洪武二年二月乙酉(二〇日)の条には「上手勅諭中書省臣曰：中書、法度之本、百司之所禀承。凡朝廷命令政教、皆由斯出。事有不然、当直言改正、苟阿意曲從。言既出矣、追悔何及。『書』云「股肱惟人、良臣惟聖。」自今事有未当、卿等即以来言、求歸至当、毋徒苟順而已。」とある。

『明史』卷一二七「李善長伝」には「明初設中書省、置左右丞相、堯領樞要、率以勳臣領其事。」とある。

- (4) 『明太祖実録』卷二六、吳元年冬十月班子(九日)の条。

『明史』卷七三「職官志」では「國家之三大府、中書總政事、都督掌軍旅、御史掌糾察、朝廷紀綱系於此。」とある。

- (5) 『明史』卷七六「職官五」には、洪武八年十月に「改設都司十有三、燕山都衛為北平都司、西安都衛為陝西都司、太原都衛為山西都司、杭州都衛為浙江都司、江西都衛為江西都司、青州都衛為山東都司、成都都衛為四川都司、福州都衛為福建都司、武昌都衛為湖広都司、広東都衛為広東都司、広西都衛為広西都司、定遼都衛為遼東都司、河南都衛為河南都司、行都司三、西安行都衛為陝西行都司、大同都衛為山西行都司、建寧都衛為福建行都司、十五年增置貴州・雲南二都司。後以北平都司為北平行都司、永樂元年改為大寧都司、宣德中、增置万全都司。計天下都司凡十有六。(中略)又於建昌置四川行都司、於鄖陽置湖広行都司。計天下行都司凡五。」とある。
- (6) 『明史』卷七五「職官四」に「洪武九年改浙江・江西・福建・北平・広西・四川・山東・広東・河南・陝西・湖広・山西諸行省俱為承宣布政使司、(中略)十五年、置雲南布政使司。宣德三年罷交峽布政司。除兩京外、定為十三布政司。」とある。

- (7) 『明太祖実録』卷一一七、洪武十一年正月の条によると、方伯とは古代における諸侯の領袖の呼称で一地方の指導者である。『礼記・王制』には「千里之外設方伯」とある。後世では「方伯」を省の行政長官の別称として用いている。刺史と

は官名であり、最初西漢に設置され、百官への監察を掌った。後に將軍の肩書きを加えて州の長官の上になった。隋の初めに郡を廃止し州・県という二つの級による行政体制とし、州に刺史を設け、行政長官とした。以来、刺史は知府或いは知州の別称として用いられるようになった。

『御制文集』卷四「承宣布政史誥」によると「迺來朕有天下、更行省為承宣布政使司。所以承者朕命也、宣者、代言之也、布者、張陳之者、所以政者、軍民休戚、國之利病、所以使者、必去民之惡導民之善、使之有畏從。於斯之職、可不重乎。」とある。

- (8) 『明太祖実録』卷一一三、洪武十年七月甲申(八日)の条。
- (9) 『明太祖実録』卷一二九、洪武十三年正月己亥(七日)の条には「胡惟庸等既伏誅、上諭文武百官曰、朕自臨御以來、十有三年矣。中間畧任大臣、期於輔弼、以臻至治、故立中書省以總天下之文治、都督府以統天下之兵政、御史台以振朝廷之紀綱、豈意奸臣窃持國柄、枉法誣賢、操不軌之心、肆奸欺之蔽。嘉言結於衆舌、朋比逞於郡邪。蠹害政治、謀危社稷、譬堤防之將決、烈火之將燃、有滔天燎原之勢。賴神發其奸、皆就殄滅。朕欲革去中書省、昇六部、倣古六卿之制、俾之各司所、更置五軍都督府、以分領衛、如此則權不專於一司、事不留於壅蔽。卿等以為如何。」とある。

- (10) 『明史』卷七二「官職」には「國家罷丞相、設府・部・院・

寺分理庶務、立法至為詳善。以後嗣君、其母得議置丞相。臣下有奏請設立者、論以極刑。」(中華書局本(以下同) 一七三三頁)とある。

『皇明祖訓・祖訓首章』には「自古三出論道、六卿分職、並不曾設立丞相、不旋踵而亡。唐・宋因之、雖有賢相、然其間所用者多為小人、專權亂政、今我朝罷丞相、設五府・六部・都察院・通政司・大理寺等衙門、分理天下庶務、彼此頡頏、不敢相庄、一皆朝廷總之、所以穩當。以後子孫 皇帝時、並不許立丞相。臣下敢有奏請者、文武群臣及時劾奏、將犯人凌遲、全家處死。」とある。

(11) 『明史』卷七十二「職官志序」には「明官制、沿漢・唐之旧制而損益之。自洪武十三年罷丞相不設、析中書省之政歸六部、以尚書任天下事、侍郎貳之。而殿閣大學士祇備顧問、帝方自操威柄、學士鮮所參決。其糾劾則責之都察院、奏章則達之通政司、平反則參之大理寺、是以漢九卿之遺意也。分大都督府為五、而徵調隸於兵部。外設都・部・按三司、分隸兵刑錢穀、其考核則聽於府部。」(一七二九頁)とある。

(12) 『明史』卷七十二「職官一」には「成祖即位、特簡解縉・胡広・楊榮等直入文淵閣、參與機務、閣臣之預務自此始。然其時、入內閣者皆編・檢之官、不置官屬、不得專制諸司。諸司奏事亦不得相閼白、仁宗以楊士奇・楊榮東宮旧臣、昇士奇為礼部侍郎兼華蓋殿大學士、榮為太常卿兼謹身殿大學士、閣職

漸崇。其後士奇・榮皆遷尚書職、雖居內閣、官必以尚書為尊。景泰中、王文始以左都御史進吏部尚書、入內閣。自後、詰勅房・制勅房俱設中書舍人、六部承奉意旨、靡所不領、而閣權益重。世宗時、三殿成、改革蓋為中樞、謹身為建極、閣銜因之。嘉靖以後、朝位班次、俱列六部之上。」(一七三四頁)とある。

『明史』卷一〇九「宰輔年表序」には「成祖簡翰林官直文淵閣參預機務、有歷昇至大學士者。其時章疏直達御前、多出宸斷。儒臣入直、備顧問而已。至仁宗而後、諸大學士歷並尚書・保・傳、品位尊崇、地居近密、而論言批答、裁決機宜、悉由票擬、閣權之重、嚴然漢・唐宰輔、特不居丞相之名耳。諸輔之中、尤以首為重。夫治道得失、人才用捨、理乱興衰、宰臣是系。」(三三〇五頁)とある。

(13) 『明史』卷七十二「職官一」(一七三八頁—三九頁)。

(14) 『明史』卷七十三「職官二」には「巡撫之名、起於懿文公太子巡撫陝西。永樂十九年、遣尚書蹇義等二十六人巡行天下、安撫軍民。以後不拘尚書・侍郎・都御史・少卿等官。事畢復命、即或停遣。初名巡撫、或名鎮守、後以鎮守侍郎與巡按御史不相統屬、文移窒碍、定為都御史兼軍務者加提督、有總兵地方加贊理或參贊、所轄多、事重者加總督。他如整飾・撫治・總理等項、皆因事特設。其以尚書・侍郎任總督軍務者、皆兼都御史、以便行事。」(一七六七—六八頁)とある。

『明史』卷四「恭閔帝」には、建文元年三月「侍郎暴昭、夏原吉等二十四人充采訪史、分巡天下。」(六一頁)とある。

『明史』卷一四二「景昭伝」には「建文初、立北平采訪史、得燕不伏法、密以聞、請預為備。」(四〇三三頁)とある。

『明史』卷一五九「佺贊」には「明初以十五布政司分治天下、諸辺要塞則遣侯伯勳臣鎮扼之。永樂之季、勅蹇義等二十六人巡行天下、安撫軍民、事竣返朝、不為經制。宣德初、始命熊概巡撫蘇・松・兩浙。越数年、而江西・河南諸省以次專設巡撫官。天順初、暫罷復設、諸辺亦稍用廷臣出鎮或參贊軍務。蓋以地大者衆、法令滋章。三司僅奉教条、修其常職、而行利除弊、均賦稅、擊貪濁、安善良、惟巡撫得以便宜從事。」(四三三二頁)とある。

(15) 黃溥『閑中今古錄摘抄』(『紀錄彙編』卷一二九)によると「向意用文、諸勳臣不平、上(朱元璋)語以故、曰「世乱則用武、世治宜用文。非偏也。」諸勳進曰「是固然。但此輩善初不自覺。且如張九四(張士誠の幼名)、厚礼文儒、及請其名、則曰士誠。」上曰「此名甚美。」答曰「孟子」有「士誠、小人也」之句、彼安知之。」とある。だが『孟子』の本文の句読は「士、誠小人也」であり、諸勳臣は文臣を排斥するため、故意に「士誠、小人也」と句読したのである。

(16) 『明史』卷二二八「劉基伝」には「初、太祖以事實丞相李善長、基言「善長動旧、能調和諸將。」太祖曰「是数欲害君、

君乃為之地耶。吾行相君矣。」基頓首曰「是如易柱、須得大木、若東小木為之、且立覆。」及善長罷、帝欲相楊憲(これは誤り。楊憲は洪武三年に殺され、李善長は洪武四年に就任した。筆者注) 憲素善基、基力言不可、曰「憲有相才無相器、夫宰相者、持心如水、以義理為權衡、而已無与者、憲則不然。」帝問汪広洋、曰「此褊淺殆甚於憲。」又問胡惟庸、曰「譬之駕、俱其轅也。」帝曰「吾之相、誠無先生。」基曰「臣疾惡太甚、又不耐繁劇、為之且孤上恩。天下何患無才、惟明主悉心求之、目前諸人誠未見其可也。」(二七七八〇頁)とある。

(17) 『明太祖実録』卷一一七、洪武十一年三月庚辰(八日)の条では、太祖は礼部の大臣に「胡元之世、政専中書、凡是必先聞報、然後奏聞。其君又多昏蔽、是至民情不通、尋至大乱、深可為戒。」と述べている。

(18) 『明史』卷二「太祖二」洪武十一年三月壬午(一〇日)には「命奏事母闕白中書省。」(三三三頁)とある。

(19) 『明史』卷二三五「楊魏伝」には「明制、六部分徃天下事、内閣不得侵、至嚴嵩、始陰撓部權。迨張居正時、部權尽歸内閣、遂巡請事如屬吏、祖制由此変。」(五九一七頁)とある。

(20) 『明史』卷二五八「華允誠伝」には「今次輔体仁与冢臣洪字同邑朋比、惟異己之驅除、閣臣兼操吏部之權、吏部惟阿閣臣之意、造門請命、夜以為常。」(六六四九頁)とある。

(21) 王世貞『弇山堂別集』卷五三によると、五府の権力は「兵部

陰移之、其權漸分矣。」となった。

(22) 『皇明祖訓・祖訓首章』。

「付記」張徳信氏は中国社会科学院近代史研究所研究員であり、中国明史学会の副会長兼秘書長をされている。一九九八年五月十五日より七月十四日まで関西大学招聘研究員として来日された。本稿は六月十七日に関西大学文学部で行われた学術講演の原稿の翻訳である。

訳者 陳建平

(関西大学大学院博士後期課程

)